

# 日本海漁業振興基本方針の見直しについて

資料4

## 1. 基本方針の概要 (H26.12月策定)

### 1 策定の趣旨

・日本海漁業再生の基本方向、新たに取り組む漁業や経営対策などを示し、漁業の安定と発展を目指すもの

### 2 振興方策の考え方

5年間で生産量が半減した後志・檜山地区をモデルに、速効性のある確実な対策を推進

この成果を早期に他地区へ波及

- ・短期間で計画的、安定した水揚げが見込める「養殖業」を柱に
- ・「未利用・低利用資源の有効活用」
- ・「漁場の有効活用」

さらに、地域の取組意欲が高い、新たな魚種の増養殖を含めて検討

### 3 展開方向

#### ①新たな養殖業への取組 → 基本の4魚種

- ・ホタテ、マガキ : 確かな実績と養殖技術の蓄積、経営的に安定し、貝毒リスクも少
- ・マボヤ : ホタテ等と組み合わせた複合的養殖可能
- ・キタムラサキウニ: 深浅移殖した種苗を短期間で身入り改善可能

※ その他、ナマコの種苗生産・中間育成、イワガキの養殖  
 ※ ウニやナマコの増養殖は、漁港等の静穏域を最大限活用

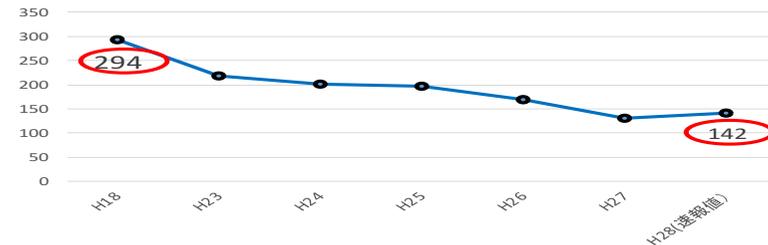
#### ②未利用・低利用資源の活用

- ・イワノリ、ブリ、アブラソノザメなどの付加価値向上、加工流通業者と連携した6次産業化

#### ③漁場の有効活用

- ・関係漁業者との調整や資源状況を考慮しながら、小型定置網や底建網の増設

日本海地域の漁獲推移



日本海地域漁獲の推移(単位:数量 千t、金額 百万円)

年次	日本海全域		うちスルメイカ		うちスケトウダラ	
	数量	金額	数量	金額	数量	金額
H18	294	67,157	43	11,689	24	3,061
H23	218	55,935	37	10,042	19	1,025
H24	202	50,226	29	7,495	20	1,484
H25	197	53,688	25	8,377	14	920
H26	170	55,237	21	6,982	11	953
H27	131	52,768	13	5,253	6	691
H28(速報値)	142	58,448	15	9,062	10	842

#### ■ウニ籠養殖



#### ■ナマコ生け簀養殖



#### ■イワガキ作業



#### ■イワノリ採取



#### ■贈答品



## 2. 基本方針に基づく取組の成果・課題

### (1) 新たな養殖業への取組

#### ○ホタテガイ

- ・ 稚貝（1年貝）から成貝まで育成する間、高水温などにより半数以上の斃死がみられる状況。
- ・ 通常、2～3年の育成期間を1年に短縮することによって、斃死のリスクが大幅に減少することから、小型貝の需要がある韓国向けの輸出に取り組み、計画以上の成果有。

#### ○マガキ

- ・ 日本海では早くから取り組む地区があり、ブランド化を推進。
- ・ 本対策によって新たに取り組む地域でも順調に生育し、規模拡大することにより、事業化の可能性有。

#### ○マボヤ

- ・ 噴火湾側で韓国向け輸出が好調であることに着目し、取り組んできているが、噴火湾に比べ成長が遅いものの管理が容易であり、出荷に向け取組を継続中。

#### ○キタムラサキウニ

- ・ コンブなど給餌により3ヶ月の短期間養殖により出荷が可能であり、また、身入りの時期を給餌でコントロールすることにより、需要時期に高値で出荷するなど高収益が期待。
- ・ これまでも海中林など餌用コンブ養殖に取り組んできたが、生産規模の拡大とともに労力負担の増加等で取組が頓挫しており、天然の海藻が乏しい日本海において餌の確保が課題。
- ・ 波浪による揺動などの影響で棘が折れるなど損傷で生育がしないことから、規模を拡大するためには漁港などの静穏域の確保が必要。

#### ○ナマコ

- ・ 近年、高級食材として高い需要から、安定生産に向け大型種苗を購入し、給餌養殖へ取り組んだが、計画どおりの生育が伴わず、生育に効果のある餌料の開発などの検討が継続されている状況。
- ・ また、漁港内などに着底基質を設置して放流し、粗放的な養殖に取り組んできたが、資源造成への効果は不明。
- ・ 他方、普及所の指導の下、漁業者自ら簡易的に採苗して漁港内に放流する取組は拡大。

#### ○アサリ、エソバカガイなど新たな二枚貝養殖

##### (アサリ)

- ・ 本事業において天然種苗での養殖に取り組んだが、生育が悪い状況
- ・ 人工種苗については、10mm以上の大型種苗は減耗も少なく、身入り良好との結果ではあるが、種苗生産体制は試験研究機関に依存。
- ・ 今後、事業化のためには、大型種苗の量産化、安定生産に向けた試験研究機関の技術開発とともに、貝毒検査などの経費に見合う生産規模の確保が課題。

#### ■ホタテガイ養殖生産実績

地区	出荷形態	生産量(トン)	実施年度
古宇郡	二年貝	141	H27
せたな	三年貝	7	H28
奥尻	半成貝～成貝	0.2	H28

#### ■ウニ端境期出荷による付加価値向上効果

地区	仕向先	単価	天然単価
神恵内	ニセコ、地元飲食店	3,000	後志
古平	イベント個売り	3,750	1,742
せたな	早出し	2,000	檜山
奥尻	市場流通(むき身)	1,620	1,315

#### ■ウニ養殖に必要な給餌量



##### ウニ籠養殖

1基ウニ 300個収容  
(重量約25kg)

##### 餌料コンブ

約350kg 必要



#### ■アサリ養殖(施設、垂下籠)



(イワガキ)

- ・ 栽培水試で生産した種苗を奥尻地区で育成し、4年で出荷サイズに至り、H27に初めて地元イベントで販売。
- ・ H25から奥尻でも種苗生産に取り組んでいるが、今後、事業化に向け、安定的な種苗生産技術の確立が課題。

(エソバカガイ)

- ・ 天然種苗の蓄養試験では、生育も見られ付加価値向上では一定の成果が得られたが、資源が不安定な状況にあり種苗の確保が困難。
- ・ 人工種苗についてはアサリと同様、大型種苗の量産化、安定生産に向けた技術開発が課題。

(ムールガイ)

- ・ 管理が簡便で身入りも良好、飲食店の評価も好評。
- ・ アサリなどと異なり種苗の確保も簡易であり、高級食材として飲食店との提携などによる需要の拡大の可能性有。

## (2) 未利用・低利用資源の活用

○ブリ活締め・ヒラメ冷凍等鮮度保持

- ・ ブリ；通常価格の1.5倍になるなどの効果があり、市場などでの定着化に向け取組を継続。
- ・ ヒラメ；冷凍保存し、品質など確認しながら周年流通の検討を継続中、また、別の加工による販路開拓を検討。

○コンブ・ワカメ養殖

- ・ ホソメ、マコンブは、製品化して直売所で販売し、養殖生産の可能性有。
- ・ ワカメは採苗に失敗したが、直売などで需要があることから、原因を確認しながら養殖生産に向け、継続して検討。
- ・ 利尻系のコンブを1年で出荷したが、生育が不良であったため、2年コンブでの検討。

○イワノリ

- ・ 漁協直売所、首都圏イベントなどで販売し、隠れた素材として一定の評価。
- ・ 今後更なる展開を図るためには、手作業での製造が主体であるため、製品の均一化、定量生産、異物混入などの課題。

○ナマコの自家加工

- ・ 漁業者自ら従来の製法の外、地元企業の施設を利用したフリーズドライの干しナマコを試作し、品質や食味で高評価。
- ・ 今後、取引が期待され、販路の拡大や注文に応じた製品の安定生産が課題。

## (3) 漁場の有効活用

○漁場の有効利用

- ・ 対策期間において養殖への取組の他、ナマコの粗放的な増養殖など利用拡大。
- ・ 養殖に適した漁港内の環境調査を11カ所を実施し、うち、4カ所は日本海漁業振興緊急対策事業にて支援する取組を実施。
- ・ また、木古内町釜谷、松前町静浦（赤神地区）は振興局独自事業で漁港内でのウニ養殖と漁業体験など観光施策とタイアップした取組を進めるなど、漁港

■ムールガイの養殖、飲食店との提携



■ブリの神経メ タグ付け



■ナマコの自家加工



の有効活用を推進。

- ・ 漁港の構造は、水深（3，5m）が浅いことから、養殖へ取り組める魚種がウニ、ナマコ増養殖に限定。

○外海漁場の有効利用

- ・ 漁場ではホタテ2年貝の養殖で計画を上回る販売実績を上げるなど成果が出ているところ。
- ・ 他方、今後、着業者の増など取組拡大を進めていくためには、他の漁業との漁場の調整が必要。

### 3. 今後の見直し方向

○ これまでの取組実績を踏まえ、基本方針の見直し方向を検討。

○ 検討の視点

- ① 漁場の有効利用による生産規模の拡大
  - ・ 漁港の静穏域を最大限活用
  - ・ 既に漁場を利用する漁業者等と漁場利用の調整を進めながら、養殖や他漁業との組み合わせによる生産の確保
- ② 水産物の付加価値向上
  - ・ 漁業者が自ら取り組むブランド化や簡易加工などによる漁業所得向上への取組を推進
- ③ 増養殖技術の開発・普及 など
  - ・ 将来を見据えたナマコの放流技術やアサリなどの種苗生産技術の開発・普及を試験研究機関などと連携して推進

### ■ 漁港の利用と観光との連携による取組

#### ■ 新たな経営手法の確立による一次産業の活性化

○ 漁港の多機能化、体験漁業による都市と漁村地域の交流人口拡大

- ・ 漁船利用が減少した漁港においてウニの養殖事業を展開。体験漁業との組み合わせによる収益増や加工品生産も併せて進めることで、新たな雇用を創出する。

【木古内】

- ・ 体験観光メニューとして、養殖場での「ウニ採り」を実施するとともに、好調な道の駅「みそぎの郷きこない」で販売。新幹線や道の駅、道南いさりび鉄道との連携により誘客を促進。

【松前・福島】

- ・ 福島から松前に未利用海藻を餌料提供するなど連携して養殖業を展開。「ウニ塩水パック」など加工品を生産、道の駅等で販売し、地元の特産物をPR。

